真剣に空に憧れて

A→S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣に空に憧れて

【Ｎコード】

Ｎ８８８１Ｗ

【作者名】

Ａ→Ｓ

【あらすじ】

「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ」「エアトレック」「塔」「軍」この四つが織り成し誕生した二人の重量子（グラビティ・チルドレン）。その二人の重力子が成長し、真剣で自分の道を刻んでいく物語。

Trick0 Prologue（前書き）

どもA→Sです。はじめてに人ははじめまして！ひさしぶりの人はひさしぶり！
今回は連載の方に挑戦してみました！一応衝動書きなのでどうなるかわかりませんが最後までやり遂げたいと思います！＊注意＊A→Sはマジ恋をしたことないので矛盾している点がありますのでそこのところはよろしくお願いします！！

Trick0 Prologue

冬の結晶　　雪

その冬の結晶が舞い散る中、まだ十歳もいかなさそうな二人の男の子と女の子がポツンと立っていた…
足には、インラインスケートのような靴を履いていた。

一人は、銀髪長髪で目は真っ赤な色をしている男の子
まだ十歳もいかなさそうなのに一目見ただけで、大人や子供もすぐに振り返ってしまうような整った容姿をしていた。

もう一人は、真っ白な長髪の髪の毛と男と同じ真っ赤な目が特徴の女の子、その子も十歳いかなさそうなのに、子供らしい可愛い顔つきをしていた。

「お前はどうすんだ？」

「僕は君について行くよ。これからもずっと…」

「その前に名前を考えた方がいいな。「塔」の中では番号でよかったが外に出た以上名前が必要だ…」

「でも、名前ってどんな風につけるの？」

「そうだな…俺は「塔」の中で観た海というのが印象に残ったからな…海人そう呼べ。」

「わかったよ～、かいと」

「それで、お前はどうすんだ？」

「僕はわかんない。どうせならかいとがつけて」

「いいのか？それで？」

「うん！」

「そうだな…安直だが…小雪ってのはどうだ？」

「こゆき……うん！今日から私の名前はこゆきだね！！よろしくねかいと！！」

「はいはい、よろしくっと、それじゃココからさっさと逃げるぞ。もうそろそろ軍のやつらが来てもおかしくないからな…」

「うん。わかったよ！かいと！！」

そして男の子と女の子はその場所から姿を消した…

Trick0 Prologue（後書き）

後悔はしている！

そして名前がほんとに安直すぎる（涙）

ごめんね…

Trick1 Ten years after

神奈川県　川神市　変態大橋

「ふぁ～～～～～…ねむっ…」
と大きな欠伸をした白い制服を着た青年が歩いていた…

その青年は銀髪で長髪体型はモデル顔負けのスレンダーで細型、しかし細型であっても逆に無駄な肉がない体つきをしており同性の男性が見ても見惚れてしまうような体型をしている。

その青年の名は
鰐島　海人
チームYellowRain（イエローレイン）を率いる総長である

「ふぁ～～～～～～ぁ、あんの糞野郎共あんなにどんちゃん騒ぎやがって思いっきり寝不足だぜ」
「でも楽しかったから僕は良かったよ～、あっ！！ハゲと冬馬だ！！お～～～いハゲ～～～～！！」

海人の後ろに着いてきていた白い長髪の美少女の女の子鰐島小雪が大きい声で言う。

「コラッ！！女の子がそんなこと言っちゃいけません！！あとおはようさん雪に海人先輩。しかし、雪は元気よすぎだろ…。昨日、あんなにチームのみんなとどんちゃん騒ぎしてたってのに…」
眠たくだるそうにスキンヘッドの少年井上準が答える。

「ふふふ、確かにそうですね。おはようございます。雪に海人さん」
眼鏡をかけ肌の色が褐色の葵冬馬が言う。

「ああ。おはようさん。ハゲは眠たそうなのになんでてめぇだけ眠たそうじゃねんだ？」

「ふふふ。ぐっすり眠るコツがあるんですよ。…っと言いたいところですが、さすがにその分野は専門外なのでわかりません。昨日はさすがに疲れましたからね。まだ寝むり足りないんですよ。」

「そうかい。もしもなんかコツがあったら無理やりにでも教えてもらおうとおもったんだがな」

「それはいいですね。私はあなただったら私のはじ「あっ見て～モモちゃんがいるよ～」…」
冬馬の言葉を小雪が遮って言う。

「お～お～、確かにいるな。しかもあれって千葉のほうでけっこー有名になっている暴風族（ストームライダー）たちじゃないのか？」

「あんなウンコクズ共が、百代の相手が務まるのかよ。俺ならともかくウンコクズ程度がまとめてかかっても無理だ。つか、終わったな…やっぱり秒殺かよ」

「おお～！！モモちゃんつよ～～～い」

そんな話をしながら歩いていると百代がこちらに気づいた

「お～～～～～い、かいと～～～～～～」

手を振りながらこちらを見つめ叫ぶ

「なんだ。百代？こっちは今絶賛寝不足で不機嫌なんだが？」

「不機嫌とはなんだ～？わたしみたいな美少女が話しかけてるんだそんな発言はだめだぞ～」

ニヒルな表情を浮かべながら川神百代は言う

「自分で美少女っていうやつは、ビッチで十分だよ。」

「なんつぅーことを言うんですが…」

と準のツッコミが聞こえた

「んで、なんだ百代？」

「さて、海人。私と戦え！！」

ビシッ！！
海人に指をさし言う。

「なんで、俺がテメェと戦らねぇといけねんだよ？」

「それは、十年前に私がお前に負けて以来お前とは勝負だろう？つまり早い話がリベンジだ！！あとストレス解消…（ボソッ）」

「めんどい。ねむい。つかれる。やだ。」

「たのむよ～～、かいと～、私とお前との仲じゃないか～」

「てめぇはそのへんとのザコでも相手していろ。いくぞ、小雪、冬馬……あとハゲ」

「ほ～い」「はい」「いま俺のこと言い忘れかけてましたよね！！（涙）」
と百代と禿の発言はスルーして海人たちは学園に向かった。

Trick2 Momoyo and Kaito（前書き）

百代と海人の出会いの話です。
すこし変だと思いますが、そこんところは無視でお願いします！
作者的には一子が川神院に来る前の出会いと考えています。
学校名って合ってるかな？
やっぱり未プレイはきついね（ー｜ー；）
Ｗｉｋｉではマジ恋のってないし…

それではどうぞ！

Trick2 Momoyo and Kaito

変態大橋でのビッチ（百代）の私と戦え！！と言った糞発言を無視した俺たちは川神学園に到着した。

俺と雪たちは違う学年なので途中で別れた。
俺は３－Ｆであいつらは２－Ｓ。

自分で言うのもなんだが俺はＳクラスに行けるほどの学力（東大に行けるレベル）はある。
だが、日頃から勉強をしているＳクラスの優等生なやつらと俺みたいに不真面目で勉強をしなくても点数取れるやつは、Ｓクラスのやつらに目の敵にされるため、おもしろそうなやつらがいそうなＦクラスに行った。

案の定面白いやつらは結構いたがある一人だけ面倒なやつがいる。

変態橋であったビッチ女こと川神百代だ。

十年前、俺はジジィもとい学園長に小雪と共に保護されて時に、ビッチとは一回試合をしたことがある。

その時は、俺はエア・トレック履きながら百代と試合をした。ハッキリ言って、もう二度とあのビッチとは戦いたくはないと思うな。エアトレックのスピードに着いてくるあいつはどうにかしていると思うし、俺の攻撃を食らい続けてもすぐ治るからめんどくさい。

勝ちはしたがおかげで、川神院の道場は半壊した。

その勝負以来、暇があれば百代は「勝負しろ！」と言ってくる。ハッキリ言ってうざいからシカトをしを続けている。オレハもうあんなクソメンドイことは二度とごめんだからな…

Ｓｉｄｅ　百代

うぅ～ん、やはり今日もダメだったか。

海人のやつめ、私みたいな美少女がこんなに頼んでいるのになんてやつだ。

あいつは今日挑んできたライダーたちや武道家と違ってすごく強いからな～なんせ私に勝つぐらいだからな。

十年前、私はハッキリ言って、私は同年代での中では最強だと思っていた。

他の武道家たちや川神院の門下生たちは一撃で倒せた。
違うと言えばじじぃやルー師範代・釈迦堂さんぐらいだ。

しかし私は強すぎるが故に孤独でひとりぼっちだった。
私が鍛錬を積めば積むほど対戦者との実力の差が開くばかりだった…

そんな中私が道場でその日鍛錬をしていると、じじぃが私と同年代の銀髪の男と白髪の女を連れてきた。
名前を聞いたところ銀髪のほうは海人、白髪のほうは小雪という名前だった。

私は一目見ただけで銀髪のやつはアバウトだが強いと思った。もしかしたら、私と同等ぐらい…
もしかしたら私はひとりぼっちではないかもしれない。そのようなことを思いながら私は銀髪の男に勝負を挑んだ。

結果は完敗だった。

インラインスケートみたいなものを履いていたが、私は銀髪の男にボコボコにされた。反撃ができないほどにだ。

私の攻撃は届かず、一方にやられるだけだった。それこそ瞬間回復を駆使したがそれでもダメだった。

気がついたときには私は医務室のベットの上だった。
じじぃに後から聞いてみたら、瞬間回復を駆使しすぎため私は気絶したらしい。

私はすぐに海人と会った。

それから、約三年ぐらいはとても充実していた。

海人とは一緒に鍛錬をしたり、小雪とは一緒に風呂とか入ったりした。

だが、そんなある日急に海人たちが川神院から出ていくと言い出した。

幸いにも県外ではなく県内、しかも川神市内に身を置くらしい、それだったらなおさらココにいてもいいじゃないか！！と、私は思ったがじじぃが言うには複雑な事情があるらしい。だが私には関係のないことだ！まだ説得中だが絶対に川神院には帰ってもらうからな！！海人！！そして私と戦ってもらうぞ！！ウフフフ、そう思うとワクワクが止まらないなぁ～。と、その前にまだリベンジをやっていないからな川上院に連れ戻すのは勝負する前に帰ってこい！！っと条件をつければいいだろう。あいつなんだかんだで約束破らないしな…

だが、まず問題なのはどう海人との勝負まで持っていくかだ…

よし！こういう難しいことは我が舎弟に任せよう！

フフフ、待っとけよ海人！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

余談だが、教室に向かう途中で海人は強烈な悪寒に襲われた。

Trick2 Momoyo and Kaito（後書き）

セリフとかあってるかな（ー｜ー；）？？
一応ほかのマジ恋小説を見てこんな喋り方かな？と思って書いたんですが…

あとココで協力をお願いします！
何回もしつこいかもしれませんがA→Sはマジ恋未プレイ者ですなので
マジ恋の大まかな流れを教えてほしいです！
A→S的には大まかな流れの中にオリジナルストーリーを入れたいと考えているのでご協力のほどお願いします！！

それでは！！

Trick3　FUCK!!!

Side　海人

３－Ｆの教室に向かっている途中にすさまじい悪寒が走ったが３－Ｆの教室に到着した。

教室に入るとクラスメイトのやつらが挨拶をしてくる。

こういう俺だが、結構クラスメイトのやつらとは仲がいい。俺は適当に挨拶を返しながら自分の席に向かった。

俺の席は教壇から見て一番右後ろの席だ。

太陽の日向がよく当たり窓を開ければ涼しい風が通る。

寝るには打ってつけの席だがそれを覆すほどのマイナスがある。

それは、俺の前の席がまたあのビッチ女こと川神百代である。

本当に勘弁してほしいと思う。

ただでさえ、勝負しろ！なの川神院に帰って来い！だのウゼェし、

そのうえに同じクラスで席が前だと！！

クソが…イライラしてきた…ただでさえ昨日チームのクソカスども

がバカ騒ぎして、睡眠不足ってのに…しょうがない今日は2時間目ぐらいまで寝るか…1時間目はＬＨＲで2時間目は歴史のおじゃるだから寝ても大丈夫だろう…もし起こしたらぶっ殺せばいいしな…

さて、俺が眠ろうと思ったした矢先に

「おふぅん、おふぅん。えぇ～3－Ｆの鰐島海人…3－Ｆ鰐島海人…今すぐ学園長室に来るように」と校内放送が流れた。

あぁーやべ～なぁ～。マジでイライラしてきた…

そう思いながら俺は学園長室に向かった

Ｓｉｄｅ　海人　Ｏｕｔ

Trick4 Two in snow 1（前書き）

過去話です！前半と後半に分けています！

もしかしたらおかしいかもしれません（｜｜；）

それでもよかったらどうぞ！！

Trick4 Two in snow 1

Side 海人

じじぃに呼び出された俺は今学園長室前にいる。

「はいんぞ、くそじじぃ」

ただえさえ、朝から睡眠不足と百代のことでイライラしてんだ、もしもしょうもないことで呼び出したらわかってんだろうな。

そう思いながら俺は扉を開けた。

Side 海人 Out

Side 鉄心

海人を校内放送で呼び出した人、学長である鉄心は思っていた。

思えばもう海人とは十年の付き合いかのぉ、あの時はビックリしたわい。

なんせ12月の真冬の中、十もいかない子供がワシが散歩していた時に雪に埋もれたまま倒れておったのだからな、ワシはすぐに川神院にすぐ戻り保護をした。

倒れておった子供たちを見てみるとこの真冬の中なのに黒い全身水着を着ていた。足元を見てみるとインラインスケートみたいなもの

を履いておった。

わしはさすがに、この服装では冷えたままになると思い、川神院の修行僧たちが使っている服装を着せかえて、客間で眠らせておいた。

倒れた子供たちを川神院の修行僧に任せて、ワシは物品を改めて見てみた。やはりあの子供たちが持っていた物品は黒い全身水着とインラインスケートだけだったようじゃのぅ。

二人が履いていたインラインスケートを見てみると小さく文字が刻まれておった。

「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ　Ｎｏ　１７８３４５」

「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ　Ｎｏ　１９５７８３」

ワシはこれを見たとき目を大きく開いた。

「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ」

ワシも詳しく知らないがアメリカや日本、ドイツの軍や政府の上層部が暗躍しており、ワシたち川神よりも、より強靭な肉体を持つ人間を作り出していると聞いたことがある。都市伝説とばかり思っておったがまさか本当だったとはのぅ…

そして、二人が目を覚ました時にワシは詳しく話を聞いた。

白く長い髪をした女の子はとても怯えていた。

銀髪の男の子は、白髪の怯える女の子を守るようにワシと話をして

きた。

銀髪の男の子は、相手に舐められないようにか乱暴な口調だった。

さすがに

「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ」の事はあまり話をしてくれなかったがある場所から逃げてきたと言った。

ワシはさらに問うたわぃ。これからどうするのか？と。

その問いに銀髪の子は黙ったまんまだった。

ワシはすぐにこう言った。

ならば、川神院にきてみないか？

Trick4 Two in snow 1（後書き）

中途半端なところで区切ってごめんなさい（^__^；）！！

あと

「Project Genesys No」の所はあまり意味がありません

Trick5 Two in snow 2（前書き）

ごめんなさい！！
前半と後半に分けたと前回で言っていましたが
もう少し過去編（百代との戦闘シーン）に力を入れたいと思いますので
前半と後半の件はなしでお願いします！

一応
何話続くかはわかりませんがよろしくお願いします！

それでは今回は海人の心情です。
駄文だと思いますが過去編どうぞ！！

Trick5 Two in snow 2

Side 海斗（子供）

もう何日走り続けただろう

ただひたすらに、俺と雪は真冬の中を必死に逃げていた。

その理由は、俺たちがある場所から逃げ奴らに追われているかもしれないからだ。

いや、十中八九追われているだろう。

なにせ、あのプロジェクトで最高傑作でありポンコツの雪がここにいるんだ。追跡してなければあいつらは無能だと思うが…。

しかし、何日間も食事を取らず走り続けたらさすがに俺達でも体力の限界が来た。

「塔」の中だったら動けるのに「塔」の外に出るとまさかこんなに身体的能力（スペック）が落ちるとはな…

だが、小雪は特別だがな…しかし、さすがの小雪も限界がきたようだ…

こう思っている間にも「軍」が追跡していると考えると俺と小雪はただ必死に、ガムシャラに走り続けた。

気がついた時には知らない天井だった。

俺と小雪は知らずのうちに、倒れていたようだ。

「かいと〜〜〜！！」
泣きじゃくるような声で小雪は俺に飛びついてきた。

暑かったため俺はすぐに小雪をひき離した。
小雪は目頭に涙を溜めて頬を膨らませながら、ぶぅぶぅ言っていたが無視をした。

しかし、ココは一体どこだ？見た限りどこかの武家屋敷みたいな感じだが…

そう考えていると扉が開き白髭を生やしたじじぃが入ってきた。
どうやらこの状況を察するにこのじじぃが倒れていた俺たちを保護してくれたらしい。

そのあとは、やはりというべきかどうして倒れていたのかと事情聴取をしてきた。
さすがに「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ」の事は言えなかったがある所から逃げてきたと言った。

さすがにこれだけでは信じないと思い、どのような言い訳をすればいいか俺は頭をフル回転させたが、じじぃはそうかと言って信じたみたいだ。

なんだ…このじじぃ、なぜ怪しがらない？と俺は内心思っていた
馬鹿なのか、相当なお人よしなのかどっちかと思うが、このじじぃ

はどう考えても後者気味だと思うが
どうも信じられない…

しかし、じじぃはこんな質問をしてきた。

これからはどうすのか？

俺は黙ったままだった。

それもはそうだ

結構長時間眠ったので。「軍」の追跡者がココにきているかもしれない。

そう思いながら考えているとじじぃはこんなことを言ってきた。

川神院にこないか？

俺は、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたのは自分でもわかるくらい驚いているのがわかった。

Trick6 Two in snow 3

「何が目的だ？」
俺はそう言った。

考えてみれば、このじじぃは本当にどうかしていると思う。
身元の不明な子供が真冬の中を倒れており保護しそしてココに来いだと…
何か目的があるとしか考えられない。

「フォフォフォ、ワシはただ単にお前たちを保護したいだけじゃ。ワシにもお前と同じ年ぐらいの孫娘がおっての。このまま真冬の中をまた放置したままにするのは心が痛いだけじゃい」

「「・・・・・・」」
俺と小雪は黙ったまんまだった。

「フォフォフォ、いきなりそう言われれば困惑するじゃろうな。それじゃあこう言えばいいかの？ワシは川神鉄心じゃ」

「「！！！！」」

「川神鉄心」そうこのじじいは言った…
まさかこのじじぃが川神鉄心だとは…

「川神鉄心」
「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ」の計画は現代世界最強武術家

川神鉄心の体のスペックを手に入れるのが計画の一つでもあった。

「だったら尚更だ。てめぇはどうやら「Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｇｅｎｅｓｙｓ」の事を知っているようだな。わかってんだろ？もしも保護するんだったら誰に狙われるのかを…」

「プロジェクトの事はあんまり知らなかったから驚いたがの。誰かに狙われる事なら心配いらないわい。ココはさっきも言った通りココは川神院じゃ。そうそうあやつらは手は出されないじゃろう？言い方を変えればココは世界中で一番安全な場所じゃ？お前たちにはとても魅力な場所じゃろ？」

「「……」」

確かにそうだ。ココには現代最強武術家の川神鉄心がいる。

そうそう「軍」が手を出せるとは思えない。

そして、「軍」の奴らは俺たちがどこか山奥や人気のいない所に行くと思うはずだ。

まさかこんな所にいるとは思うはず…

俺はそう頭の中でメリットデメリットを考えた。

そう考えた結果俺の答えは決まった。

「わかった。あんたの保護を受けさせてくれ」

Trick7 Two in snow 4

じじぃの案に乗った俺と小雪はじじぃと川神院の中を歩いていた。

「なぁ？どこに向かってるんだ？」

「フォフォフォさっきも言った通りワシには、海人や小雪と同い年の孫娘がおっての今道場で稽古をしてるのでな。稽古を見るついでに顔合わせじゃ」

じじぃはそう言った。

あと、じじぃが俺たちの名前を呼んでいるのはさっき名前を教えたからだ。

最初は海人君や小雪ちゃんと言っていたがむず痒くなったので呼び捨てにさせた。

「フォフォフォ、ついたぞ」

そしてじじぃは道場の扉を開けた。

道場の中に入ってみると、俺と小雪と同年代ぐらいの女の子が型の練習をしていた。

髪はセミロングで肩にかかるぐらいの綺麗な黒髪でスレンダーな体型をしていた。

「じじぃ、そいつら誰だ？」
黒髪の女の子が言ってきた。

「フォフォフォ、今日からココに住む子たちじゃ名前は銀髪の子が海人。白髪の子が小雪じゃ」

「よろしくな」
「よろしく～」

「川神百代だ。よろしくな」

じじぃの孫娘と聞いていたが何か理解不能な事をしてくるのかと思いきや、何気に礼儀が正しいことにビックリした。

が

その考えは予想道理当たった。

「銀髪の…えぇーと海人だったけか？お前強いだろう？私と戦え！！」

「は？」

予想外であり唐突すぎて俺は意味がわからなかった。

Trick8 Two in snow 5（前書き）

戦闘描写って難しいですね…
どう書けばいいかマヂわからないっす…

Trick8 Two in snow 5

川神院　道場内

本当にどうしてこうなったと海人はふと思う

じじぃに連れられて目の前にいる少女川神百代と顔合わせだけの話だけだったはずだ

それが今はどうだ？目の前にはつい先ほど顔合わせをしたばかりの少女川神百代がなぜか体をウズウズと動かしていた

「おい？俺の気のせいか？今戦えって聞こえたんだが？」

「フフフ気のせいではない私はちゃんと戦えと言ったぞ」

どうやら俺の気のせいではなかったらしい

「今しがた顔合わせしたやつに戦えってお前頭のネジ取れてんじゃねぇのか？」

「失礼だなお前？私の頭のネジは取れていない！！」

「頭のネジが取れている以外そんな発言はしねぇーよ」

「フォフォフォ、まぁー落ち着きなさい」

このままでは埒が明かないと思ったのか鉄心が会話に入ってきた

「して、百代？なぜいきなりそんなことを言ったのじゃ？」

「なぜだとじじぃ？早い話そいつらが強いから言ったまでだ。立ち方がそうだお前たち武術を噛んでいただろう？しかも相当な種類だ。だが小雪より海人が強いと思ったから言ったまでだ」

「・・・・」

こいつ一目見ただけで気づいたのか…

確かに「塔」にいた時は俺と小雪はさまざまな訓練を受けていた気づかれないようにうまく隠していたと思ったんだがな…

「だと言っているが？どうするんじゃ海人？」

「ああ。いいぜ。受けてやるよ」

「海人！！」俺の後ろに隠れていた小雪が少し大きな声で言う

「大丈夫だ。「塔」の中と外の違いを少し確認してくるだけだ」

「でも…」

「大丈夫だ」

「じじぃ。俺たちが履いていた靴はどこにある？」

「フォフォフォ今取りに行ってくるぞい」

5分後

エアトレックを履いた俺は川神百代と向かい合っていた

「ローラースケートみたいな靴を履いてなめているのか？」と百代は不機嫌な声で言う

「大丈夫だ。問題ない」

「フォフォフォ、

それじゃ始めるぞい…

両者尋常に…

始め！！！！」

「わりぃな、終わりだ」と海人は百代の目の前に瞬間移動したように現れてそう言った

「な！！！」

百代は瞬間移動したように現れた海人にビックリし防御をできず海人のパンチを腹に食らった

ドゴォォォォォン！！！

と騒音と共に百代は道場の壁にぶつかった

「チッ…やっぱり「塔」の外だと体のスペックが落ちるな」とそう呟いた

「おい、じじぃ終わったぞ」

「フォフォフォまだまだ終わりじゃないぞ」

「あ？？」

「フフフ、ビックリしたぞ。急に現れたから防御ができなかったぞ」海人のパンチを受けたにもかかわらず何事もなかったようにそう呟いた

「まぁーさすがはあの世界最強武術家の孫娘だけではあるな。さすがにあんなんじゃやられねぇーか」

「フフフ。まだ始まったばかりだ。楽しもうではないか。かぁぁぁぁぁぁあいぃぃぃぃぃとぉぉぉぉぉ！！！！！！」

百代は咆哮をあげながら俺に向かってきた

「いいぜ。来いよ。川神百代！！」

Trick8 Two in snow 5（後書き）

なんか中途半端な気がする…

Trick9 Two in snow 6

「チッ…」

「ハハハ！！！さっきの威勢はどうした海人！！」

百代は海人に向かって殴りのラッシュをしている。
海人はエアトレックで、バック走しながらきちんと拳をさばきながら避けている。

「なめてんじゃねぇよ！！」

百代の殴りのラッシュの中、わずかながら小さな隙を見つけ出し左手を百代の腹の部分に出し崩券を放つ

ドン！！！！！

百代はまた壁に吹き飛ばされた。

最初のただの手抜きパンチではなく、きちんと相手をノックアウトをするように正真正銘本気でやった。

しかし百代はまたもや何事もないように立ち上がった

「フフフ、陳式太極拳か…初めてみたぞ」

「てめぇ本当に人間か…今のはけっこーマジでやったぞ」

瞬間回復か…本当に持っていたんだな…

「塔」のデータもあながち間違えではなかったんだな…

だが、瞬間回復は聞こえはいいが体に相当な負担がかかるはずだなら、やることは一つしかねぇな…

「それじゃ、そろそろ本気でやるぜ…死ぬなよ。加減はできねぇぜ」

目を覚ませ牙！！！！

そう言った瞬間に海人の履いていたエアトレックが反応した。

ガキンッ

ガシュと音を出しエアトレックが変形した

黒のエアトレックのシューズは変形した事により、神々しい銀色のエアトレックになっていた。

エアトレックシューズが変わったことにより空気が変わり空間が軋む。

「フハハハハハハハ！なんだ！！隠し玉があったのか！！いいぞ！私はこんな試合がしたかったんだ！！いくぞかいとぉぉぉぉぉぉ！！！！」

百代は興奮したのか大きい吼える。

海人がエアトレックで一気にトップスピードに乗りストップしながら右足を振り上げる。

Ｌｅｖｉａｔｈａｎ（リヴァイアサン）

エアトレックは、いくつかの道というものがある。

海人はそのいくつかの道の一つ血痕の道（ブラッディ・ロード）を走っている。

血痕の道（ブラッディ・ロード）

「牙」とあだ名されるその道の特徴とはすなわち

：

キレ

キレとは単なるスピードや瞬発力のことではない、制止状態からの凄まじい０加速、一瞬で到達するトップスピード、そして何よりも重要なトップスピードを瞬時に静止状態に戻すフル・ブレーキング能力、その０－１００－０と言われる過酷な運動の核となるのはやわらかく強靭な太股の筋肉群。

普通の人では牙は打てないし、なにより打つ前提に玉璽（レガリア）という部品（パーツ）が必要とである。

玉璽（レガリア）…その道の王が自分だけの専用パーツのことである。

だが、海人は普通の人ではない作られた子である。
そして、海人はその玉璽（レガリア）を持っていた。

つまり、海人は血痕の道（ブラッディ・ロード）の現在の牙の王である。

そして話は、戦闘に戻る。

ＭＡＸスピード→０の制動エネルギーをすべて吸収し回転エネルギーに変換し再び「外」に向かって一気に放出しようとする。
その膨大なエネルギーと牙の道（ブラディ・ロード）のキレが合わさった時に大気が裂ける。その衝撃波は強大な牙と化す。

「な！！！」

そして百代は海人が生み出した牙に飲み込まれた。

Trick10 Two in snow 7

「クハハハハ！！いいぞ！！もっとだ！！もっと！！私を楽しませろ！！」

「やっぱり効いてねぇか…」

「次はこっちからいくぞっ！！」

「ハハハハハハハ！！」

百代は海人に瞬間的に移動し、猛ラッシュを加える。
しかし海人は百代の猛ラッシュを焦らずに捌く

チッ！こうも距離を詰められるとさっきのような大きな牙は出せねぇ…ならば…

「うぜぇ！！」

海人は百代に向かって無数の牙を放つ
だが先ほど放った牙ほど大きなものではなく半分ぐらい小さい

「ハハハハ！！効かないぞ！！」

チッ！まさか自分から当たりに行くかよ。
だがわざわざ食らってきてるんだ、ありがたいねぇ。

「てめぇは脳筋か？近すぎてもダメなんだよ」

海人は近づいた百代にみぞおちに崩拳を食らわす

「グッ！ハッ！」

百代は歯を食いしばりながらも海人と距離が離れる。

今でボコる！！

Ｌｅｖｉａｔｈａｎ（リヴァイアサン）！！！！！

海人は、数十の牙を百代に向けて打ち放つ。

「私をなめるなよ！！川神流奥義　星殺し！！」

しかし百代は体中にあるエネルギーを圧縮した巨大なビームを放つ。

数十の牙とビーム

二つの強大なエネルギー同士の衝突は床唸り、壁が軋む。

この二つの強大なエネルギーは拮抗に張り合いながらも凄まじい光

や音を出し衝撃が吹き荒れる。

そして、この拮抗は徐々に崩れ始めた。

百代が圧され始めたのだ。それもそのはず最初の打撃に崩拳、牙を食らっているのだ。

瞬間回復で体力が回復してもダメージは蓄積したまま、それに加えて海人はノーダメージ。

有利さといえば誰もが後者だろう。

「クッ！ッソ！！」

ついには海人の放った牙が百代のビームを打ち破った。

Trickll Two in snow 8（前書き）

Trickll Two in snow 8

いつからだろうな…

この戦闘に対する欲求が溢れだしたのは…

いつからだろう…

私の周りに敵がいなくなったのは…

最初はただ楽しかっただけだった。

私より大きい敵を倒す快感が爽快でとても好きだったから。

そして気が付いていたら私は必死に武を磨いていた。

より強いを倒すために、よりこの快感を得るために。

だけどその想いはすぐに散った。

私が武を磨けば磨くほど周りとの差が開くばかりだった。

挑んでくる奴らも私の一撃でやられ、川神院の修行僧達もそうだった。

唯一私の相手をしてくれるのは川神院の師範代の釈迦堂さん、ルー師範代、じじぃだけだった

虚しかった…

私はただ強いやつと戦いたいだけだったというのに…

そんなある日、道場で今日の訓練のカリキュラムを消費しているとじじぃが私と同年代ぐらいの二人の子を連れてきた。

一人は銀髪の男、もう一人は真っ白い髪で白い肌が特徴の女の子。

私はじじぃと二人歩いて来る瞬間を見たとき、なにかが私の体に電気が走った。

あの二人は歩き方に一切無駄がなかった。いつどこでどの方位にも襲われてもすぐに対処できるように一切の隙のない歩き方だった。

特にあの銀髪は女の子より強い…

名前を聞くと男の名前は海人、女の名前は小雪

私は男のすぐに勝負しろと言った。私の体のなにかがすぐに戦えと疼いている。

案の定いきなり言われた事にビックリしているが私には関係ない。はやく戦いたいそう思っていた。

なぁー

お前は私の

この疼きを

この渇きを

この虚しさを

満たしてはくれるのか？

Trick12 Two in snow 9

勝負にこぎつけた私は海人と向かい合っている。

海人は、じじぃとなにか話をしてじじぃが道場からいなくなったと思うと、インラインスケートみたいな物を持って戻ってきた。

そして、海人はじじぃからインラインスケートを受け取りシューズを履いてる。

私は不機嫌な声で言った。

なめているのかと?

そんなおもちゃで、試合するのかともし舐めているようなら私は許さない。私は武道家だ。試合を舐めているようなら武道家なら誰だって許さないだろう。

しかし、海人は特に問題はなさそうに問題ないと言った。

そして試合の号令が道場に響いた。

号令が、鳴り響いた瞬間に私の目の前に海人が現れた。

そう急に現れたのだ瞬間移動したように

私は目にも自信があるが、急に瞬間移動したように現れたため防御もできずボディに海人のパンチをもらってしまった。

パンチの威力は、すごく道場の壁にぶつかってしまい壊れてしまったが、私には関係ないどうせじじぃが直すしだろうしな。

だが私はいま内心とても嬉しかった。何年ぶりだろうな防御もできずにボディにパンチをもらったのは…

フフフ…無意識に頬が緩み笑いが込みあがってくる。

だが、この程度では私には全然効かないな。

そして私は海人に近づきラッシュを繰り出す。しかし海人はきちんとラッシュを捌いている。

ハハハ！！こうではなくてはな！！

しかし、海人は私のラッシュの中から小さな隙を見つけ出して腹の部分に崩拳を放った。

ドン！！！！

鈍い音が私の腹に鳴り響いた。

先ほどのパンチとは違ってとても重かった。

またも壁にぶつかったが私は倒れている間に冷静に海人の崩拳や型を分析をした。
あの型からして陳式太極拳か…

フフフ、本当に楽しいな強いやつと戦うのは…
海人の奴は少し冷や汗を流していたが目つきを変えた。

その瞬間海人が履いていたシューズが黒色から神々しい銀色に変わりシューズも変化した。
私は興奮したこんな隠し玉があるのかと！！と

そして海人が大きく足を振った。
振った瞬間に目にもハッキリとわかるぐらいの大きな衝撃波が襲い私を飲み込んだ。

Trick13 Two in snow 10

牙に飲み込まれた百代は、また道場の壁にぶつかりながらもなぜか心は満ち溢れていた。

あぁー本当に楽しいな、久しぶりだこの感覚は…この試合がずっと続けばいいと思っていた。今までの挑戦者たちは私が一撃を与えただけですぐにやられてそこでいつも試合は終わる。

しかし、今は私の一撃をもらわずにあまつさえ私は倒されている。

こんなに完膚なきまでにやられたのはじじぃ以来だな…

あぁー、もっと楽しみたいけど…このままボコられるのは癪だからな。

そして私は一歩で海人の前に移動し猛ラッシュを与える。

だが、海人はまるで問題ないように私のラッシュを捌く。

海人は、先ほどとは大きさが半分ぐらい小さくなった無数の衝撃波を放った。

だが私はその衝撃波を避けなかった。さすがに先の大きな衝撃波を食らうのはさすがに堪えるがこの小ささなら別に問題ない。

だが私が前に来たことによって海人はまたもや崩拳を私にお見舞いする

私は、思わず歯を食いしばりながら耐える。崩拳も我慢すれば大丈夫だが急所に当てられるとさすがにきついな…

気がつくと海人はまたもやトップスピードに乗り大きく足を振りかぶって数十もの衝撃波を放っていた。

私は頭の中で考えた・・・

回避…多すぎて不可能

防御…一発であれだけ体が堪えるので数十も食らったらＯＵＴ

ならば迎え撃つまでだ！！

しかし、衝撃波を迎え撃つにはあの技しかない！！

つい先週じじぃに教わったばかりだから完璧というべきではないがやるしかないな！！

川神流奥義　星殺し！！！

私は、体中にあるエネルギーを圧縮した強大なビームを放つ。

強大な二つのエネルギー同士の衝突は床が唸り、壁が軋む。

しかし私が繰り出した星殺しが押され始めた。

くっ！！やはりダメージの蓄積があったか…

瞬間回復でどうにかなると思っていたがやはり無理だったか…

そして私の星殺しは海人の衝撃波に破られた。

これが負けた瞬間なのか…
負けは悔しいがこうも心が満ち溢れるのはとても気持ちがいいな…
気がつけば一人だった孤独だった

だけど私は想う。

よかった…この世界には私より強い人がいた…
私は一人ぼっちじゃなかったんだな…

目の前にはいつもより鮮やかにみえる無限の大空のビジョンが見えた…

Trick14 Two in snow Final（前書き）

さまざまなユーザー様からの指摘で上がっていた
読点、句点などを意識して書きました。

これで大丈夫だと思うけど、やっぱり不安です（ー__ー；）

Trick14 Two in snow Final

川神院道場

つい、十分ほど前とは今やとても悲惨な状態になっていた。
壁には亀裂や穴があり、床はそこが抜けてしまっていた。

その道場に声が響き渡る。

「おい、じじぃ。たぶん終わったぜ」
海人は小雪と共に見学していた川神鉄心に言う。

「フォフォフォ。そうじゃのう、百代はどうやら気絶しているようじゃしご苦労様じゃったの。しかし、ちっとばかしやりすぎではないかの？」

「イキナリ勝負を仕掛けてきたんだ。問題はあいつにある。」

「う～む。明日からの鍛錬どうしようかの…」

「かいと～おつかれさま～」

「あぁ」

しかし、こうも「塔」の中と外が違うとな…あれだけの牙の数でもう足に負担が来るか…「軍」の奴らと接触する前にこれはどうにかしないとな。

海人は足に違和感を感じながらそう考えていた。

「それで？あっちに気絶している孫娘はどうするんだ？」

海人は、親指で後ろに気絶している川神百代に指を指す。

「大丈夫じゃ。モモも、瞬間回復ですぐに復活するじゃろうし、ワシが医務室に連れておくわぃ。それよりも疲れたじゃろう？さっきの居間で休んでるといい。それともその足では居間までいけないかのぅ？」

「大丈夫だ。別に問題ねぇよ、小雪いくぞ。」

チッ…やっぱり気づいていたか…

「ほ～い」

そうして海人と小雪は居間に向かった。

医務室

「う…ココ…は？」

「おお。目を覚ましたようじゃの。」

日頃聞き慣れている言葉に、百代の意識は完全に覚醒した

百代は今の現状を察して、あの衝撃波を受け医務室のベットで寝かされていたのだろう。

「そ…うか…、私は負けたのか…」

「そうじゃ、お前は負けたのじゃ」

「だがなじじぃ、負けたというのに私は悔しさよりなぜか爽快感がでている。」

これまで私は一人ぼっちと思っていた。だけど違った。私はひとりぼっちではなかったんだ。そう思うとなぜか心が爽快感に満ち溢れている。

「フォフォフォ。それはいいことじゃ。それで体調はどうじゃ？」

「あぁ、問題ない。逆に調子がいいみたいだ。そうだ！！じじぃ！！あいつらは今どこだ！！」

「海人たちなら客間のほ「そうか！わかった！」う…ってもう行きおったか、フォフォフォ、しかしあんな楽しそうなモモを見たのは久しぶりに見た気がしたのぅ」

鉄心は笑いながら言う。

「これからどうモモが変わっていくか。楽しみじゃのう」

鉄心は海人たちがいる居間のほうに歩きながら呟いた。

「もうあれから十年か。時が過ぎるのは早いのぅ…あの後の三年間はモモが一番楽しそうに過ごしていたな。」

しかし、海人たちが川神院に引き取られて三年後に海人が川神院からでると言い出したときのモモの暴れぶりはヤバかった…おかげで道場は半壊、唯一の救いが川神市に残ってくれた事が助かった。

そう想いに耽っているっと扉からノックする音が聞こえた。

おぉそういえば海人を呼び出しているのじゃった！！こうも耽っていると物忘れが激しくなるのが痛い。

しかし、海人はこのことをどう反応するのか。

なんせ「軍」関係者の子がこの学園に転入してくるのじゃからのぅ…

Trick14 Two in snow Final（後書き）

感想待っています！！

Trick15 It is becoming troublesome

「じじぃ…なんかようか？」

「まぁーの、実はな、海人ココ川神学園に留学生が来るんじゃよ。その件でワシはお主を呼んだんじゃ。」

「は？留学生の件って話だけで、俺を呼んだのかよ？じじぃ？だったら俺は戻るぜ。今日は寝不足なんだよ。」

海人は扉の取っ手に触ろうとした瞬間

「その留学生が『フリードリヒ』だったら？」

ピクッ

海人は反応した。

「じじぃ…今なんつった…？」

低く感情のこもっていない声が海人から聞こえた。

「『フリードリヒ』っと言ったんじゃ」

海人はすぐさま鉄心に振り向き瞬間的に移動し、制服の袖から二丁の銃を取り出し、鉄心に銃口を向ける。

「じじぃ…てめぇ…正気か？『フリードリヒ』はあの計画にも関わってたんだぞ…」

ドスの効いた声で海人は言う。

「しょうがあるまいて。川神市と姉妹都市であるドイツのリューベリック市から交換留学生として来るのじゃからのう。」

「その交換留学生は何学年に留学するんだ？」

「二学年じゃ…ついでにFクラスとなっておるわぃ」

「Fつぅーと、風間の奴がいるところか…」

「留学生が来るのはあと二週間とちょいあとじゃ、まぁーそのことで読んだちゅうわけじゃぃ。」

「二週間…か」

「まぁーいいさ、関わらなければいい話だしな。」

銃を袖の中に隠し、扉の前に向かう。

「すまんのう」

「あぁ…俺はもう戻るぜ」

「フム、しっかりと勉学に励むようにのう」

「誰に言ってんだ？じじぃ」

ニヒルに笑いながら右手の中指をじじぃに向け、海人は出て行った。

「『フリードリヒ』か…」

めんどくさくなってきたな…

そう思いながら海人は歩きながら窓の外をみていた。

空はとても蒼く雲一つもない快晴だった。

Trick15　It is becoming troublesome（後

今まで書いた奴は全部相当改善しました。

出るわ出るわ
矛盾の数々
何言ってるかわからない文章

改善したからまだマシになったと思う…

それでは　ノシ

Trick16　A　noisy　classmate　（前書き）

時間軸がおかしいかもしれませんが、そこんとこよろしくお願いします。

Trick16　A noisy classmate

教室に戻りながら留学生について俺は考えていた。

フランク・フリードリヒ

ドイツの軍人で稀代の名将と呼ばれている。

たぶんそいつの子供が留学生だろう。

まだ、俺が「塔」にいた頃、研究者のやつらと話をしていたのを覚えている。

ドイツ語を話していたが、俺はその時は6ヶ国語を話せた。

よく耳をすましてみると、どうも軍の兵器についてと『猟犬』たらなんたら話していたが…

さて、どうするか…こう考えているうちに教室に着いてしまった。

チッ…考えても仕方ねぇ…来ることは確定だ…その時に考えるか…

教室のドアを開け、自分の席に着く。

時間はＳＨＲ始まる五分前

『フリードリヒ』の件で眠る気分じゃねぇしな…とそこで

「海人くん。学園長に呼び出されてたけど大丈夫だったっ？」
「あぁ…燕か…別に特に問題なかった」
「そうなの？何か問題が起きたなら手伝おうとおもったんだけどなぁ～」
「問題なんかおこさねぇよ」
「確かに海人くんなら証拠残さずにやりそうだろうね」
「わかってんじゃねぇか」
「顔怖いよ…、あっ！！あと海人くんありがとうね！！お父さんの件。本当に急に借金取りが来なくなったよ！！」
「なら、よかったじゃねぇか」
「でも、海人くん相談した翌日に来なくなったけど「シー」…」
俺は右手の人差し指を燕の口の前に指し、左手で自分の口前に人差し指を立てながら言った。
「こなくなったなら、よかったじゃねぇか…それで問題なしだ。Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」
「う、うん」
「かーいーとー」
そこで百代が現れる。

「お前わたしみたいな美少女がいるのに、他の女を口説くとは、ひどいな～」

「うぜぇな。朝あんなにかまってやっただろうが。」
頭を掻きながら俺は言う。

「あれではも「キーンコーンカーンコーン」」

「オラ、席に座れ。燕もだ。」

「そうだね」

「ま、わたしは前の席だがな！！！」
偉そうな口調で百代は言った。

コイツはどうしてこうも元気なんだ…

と海人は空を見ながらそんなことを考えていた。

Trick17　Yellow　flag

チャイムが鳴り、担任のゲイルが教室に入ってきた。

こいつは全米格闘王で兄弟でペアを組み、弟のゲイツが対戦相手を分析し、それに基づく必勝法で勝ち続けてきたらしいが、ついこの前に百代に勝負を挑んだらしいが、一撃でやられたらしい。

そして、ゴツイ顔つきなくせに授業はわかりやすかった。

ゲイルがＳＨＲで必要事項などを言っていた。来週は体力測定やらなんたら言っていたが、俺は窓の外を眺めていたら眠気がやってきた。

どうせ、もともとから眠るつもりだったため、俺はすぐさま机に伏せ意識を手放した。

起きた時には六時間目が終わるころだった。

丸一日寝てたな…

前の席の百代も寝ているようだ。どうりでうるさくない訳だ。

キーンコーンカーンコーン

っと…丁度よく終わったな

俺はすぐさま鞄を持ち、教室を出た。

今日はスーパーが特売日なため、すぐさまスーパーに行かなければならない。

特売日をやっているスーパーに向かっている途中、河原に向かった。

このほかほかな小春日和の中だ。たぶんあいつが河原で寝ているだろうと思い河原に向かったら、案の定そいつはいた。

「おい、辰子。起きろ。」

寝ている人物辰子の体を揺さぶりながら、俺は言った。

「うぅ～ん…あっ、かいちゃん～」

と言って、俺に抱きついてきた。

「お前まだ寝ぼけてるだろう…おい、離れろ。」

「かいちゃん～いい匂い～…ＺＺｚｚｚ」

「寝やがった…」

「しょうがねぇ…一回、Ｙｅｌｌｏｗ　ｆｌａｇ（イエロー・フラッグ）に連れていくか…亜巳がいるだろうしな…」

俺は辰子をおんぶし、Ｙｅｌｌｏｗ　ｆｌａｇに向かった。

Ｙｅｌｌｏｗ　ｆｌａｇ（イエロー・フラッグ）

俺たちＹｅｌｌｏｗ　Ｒａｉｎ（イエロー・レイン）のホームを構えている酒場のような感じの飲食店である。そのため料理とか、酒はある。

場所は親不孝通りというドロップアウトした連中が巣を構えている所にある。そのため、こういった場所にあったらすぐさま不良たちが強盗とかされるのが落ちだろうがそれはない。

さっきも言った通り、ココはＹｅｌｌｏｗ　Ｒａｉｎのホームなため、不良共は手を出せない。そもそもＹｅｌｌｏｗ　Ｒａｉｎは親不孝通り全般をホームにしている。つまり親不孝通りのボスチームである。

最初は、俺と小雪がココに来た時は、不良共の連中が歓迎だとかなんとか向かってきたが、一週間足らずで黙らせた。骨のあるやつとかがいたが。

Ｙｅｌｌｏｗ　ｆｌａｇに着き、中に入るとＹｅｌｌｏｗ　ｆｌａｇのオーナーで辰子の姉である亜巳が準備をしていた。

「おい、亜巳。辰子拾ってきたぜ」

「わるいねぇ、やっぱり辰の奴、河原で寝ていたのかい？」

「まぁーな、それじゃ居間のほうで寝かしておくぞ。俺はいまから買い物だ」

「そんな美男子が主夫って笑えるねぇ」

「うるせぇよ」

そう言って後ろにいる亜巳に、中指を立て俺はスーパーに向かった。

Trick17　Yellow　flag（後書き）

Ｙｅｌｌｏｗ　Ｒａｉｎ（イエロー・レイン）
海人が率いるチームである。親不孝通りを束ねるチームである。
人数はまだ未定である。

Ｙｅｌｌｏｗ　ｆｌａｇ（イエロー・フラッグ）
親不孝通りにある飲食店。結構おいしく人気である。
Ｙｅｌｌｏｗ　Ｒａｉｎが主に拠点を置いている店なので、ケンカなどは御法度なので、中立的な場所である。
Ｙｅｌｌｏｗ　Ｒａｉｎメンバーは主にココに集まる。

Trick18 Close brothers and sisters

スーパーで買い物を終え、俺は家がある親不孝通りを歩いていた。
たく、あのばばぁ共、遠慮ってものをしらないのか…
そう思いながら、親不孝通りを歩きながら考えていると

「おい！！」

「アァ？」

そう返事をし、声をかけられた方向を向いてみると金属バットなどを持っている１０人ぐらいの不良共がいた。

「テメェ、ＹｅｌｌｏｗＲａｉｎのヘッドの鰐島海人だな？」

「だったら？」

「ケッ！テメェの噂はうちの県まで噂がきてるんだよ！」

なるほど、通りで喧嘩を売るわけだ
俺は、制服の袖に隠している銃をだそうと思ったが

キュィィィィィィィィイン

ん？

遠くからＡ（エア）・Ｔ（トレック）のモーター音が聞こえる。

不良たちには聞きとれないとても小さい音だ。

この走り方は…

「…いうわけで、テメェを倒せば俺たちは有名人で人気者になるんだよ。だから、さっさとやられろや！！」

不良の一人が、俺に近づき金属バットを大きくに振りかぶる。

「こゆきっーーーく」

「へっ？……ゲバブッ！！」

上からA・Tを履いていた小雪が現れ、不良の頭を踏みづけた。

「まだなのだ～」

小雪はすぐさまA・Tで不良集団に向かって移動し移動をした。

「なっ！！」

不良たちが、急に現れた小雪に驚愕しているがもう遅い。

「ほいほ～い」

「ガハッ！！！」「グハッ！！！」

小雪は驚愕している不良集団にキレのある蹴りで華麗に不良集団を一蹴した。

「かいと～、おわったよ～」

「よくやったな」

そう言い、近づいてきた小雪の頭を撫でる。

「えへへへ～」

満面の笑みで照れながらで小雪は喜ぶ。

「走ってきたのか？」

「うん！走ってないとおちつかなくて～」

「そうか、今日はスーパーがセールだったから夕食は豪華だぜ」

「やった～、マシュマロある～～？」

「ああ、あんぜ」

そう話しながら、俺たちは不良共を放置して家に向かって帰っていた。

その後ろ姿を見てみると二人は、とても仲の良い兄妹に見えた。

Trick18 Close brothers and sisters（後

ほのぼの系は好きなのだよ。

Trick19　Agito（前書き）

オリキャラ登場！！

Trick19　Agito

自宅にもどり、小雪と夕食を食べ終えた後は、チームがよくあつまるＹｅｌｌｏｗ　ｆｌａｇに小雪と共にいた。

Ｙｅｌｌｏｗｆｌａｇの料理はとても美味で、親不孝通りではとても人気がある。だが、一定の時間帯になるとＹｅｌｌｏｗｆｌａｇの貸し切り状態なる。

「それにしても今日は誰もいないね～」

「そうだな」

「昨日あんなにバカ騒ぎしたんだ、来たらあほだよ」

洗い物をしながら亜巳が言う

たしかにな…俺はカウンターの椅子に座り、タバコを吹かしながら思った。

そもそも、ＹｅｌｌｏｗＲａｉｎのメンバーは不定期に集まる。誰も来ない日もあれば、全員が集まる時も来る。昨日はメンバーのほとんどが集まり、ココでバカ騒ぎをした。

今日は来ない日かもな…そう思い帰るかという時に、ギィイイっと扉が開いた。

「……」

入ってきたのは１５・６歳の男の子で、場違いの黒のジャージを着

け足にはジャージと同じ真っ黒いA・T、髪はウルフカット、目はとても鋭かった。そして、その少年は刀を持っていた。

「へぇ～」

「へ～、珍しいじゃねぇか…お前がココまで来れるなんて…アギト」

「あぎと～ひさしぶり～」

「ども、海人さん、小雪さん、亜巳さん」

「んで、今回の放浪癖でどこまで行ってきたんだ？放浪癖がある方向音痴さん？」

「ほ～こ～おんち～」

「石川県のほうまで…」

アギトは遊ばれているとわかってか、プイッと目をそむけながら答える。

「どうしたらそこまで行くんだよ…」

「それで？あっちでなにやってたんだよ？ただの観光しに行ったのか？」

「それもあるんですが、真剣試合してきました」

「ほえ？」

「は？」

全員が呆けた

「あのおじさんけっこー強かったです、まぁー勝ちましたが…」

「観光から真剣試合って…」

「おみやげは～？」

「はい、コレです」

アギトは小雪にお土産を渡す

「今日は、誰もいませんね…」

「昨日はこのバカたちが騒ぎまくったからね、今日はもう来ないかもね」

「そうですか…」

「なら、そろそろ帰るか。小雪帰るぞ…土産は家で食え」

「ほ～い」

「気をつけて帰りなよ…っと言いたいところだけど、お前たちは心配いらないね」

そして、俺と小雪、アギトはＹｅｌｌｏｗｆｌａｇをあとにした。

「そういえば、試合終わった後に俺が川神学園の一年って言ったら、

娘も川神学園に進学したって言ってました」

「てことは、お前とタメの高一ってことか…」

「もしよかったら、娘と仲良くしてくれって…」

「ふ～ん、それでそいつの名前わかるのか？」

「ええーと、確か黛由記江って名前だったはずです」

Trick19　Agito（後書き）

そろそろ風間ファミリーや原作キャラたちと関わらせたいなぁー

あと、どうA・Tを組み合わせるか…

Trick20　An unprecedented fellow

あれから数日後…

ドイツの交換留学生の件はまだ解決策は見つかってない。

ココは、いっそその留学生とは関わりを持たなければいいと思う。

学年は2年なので、冬馬たちに関わるなと言えば大丈夫な気がするが、なにせ留学生はF、冬馬たちがSココが問題点である。

FとSは犬猿の中である。そこが問題だ。劣等のF、優等のS…どうするか…

まだ、最善な解決策は見つかっていない…

午前の授業を終え、学食を食べに向かった。

学食では、レパートリーが多く、さまざまな料理がある。

いつもはパンとか買って、教室で食べるのだが、今回は学食が食べたい気分なので、学食にした。

「ねぇー、あの人ってMOTEMOTEっていう本のモデルの人じゃない？」

「うん、たしかエレガンテ・クアットロで三年の鰐島海人先輩だよ」

「あ～…かっこいいなぁ～／／／」

周りの女性が小さく囁きながら言っているが俺はシカトした。

今日はどうするか…

ラーメン
うどん
かつ丼
親子丼
カレーライス
ハンバーグ
パルミジャーノチーズのリゾット
シュバイネハクセ
フォアグラやキャビア、ゲテモノ料理などがある。

今日はラーメンにするか…

俺はお金をチケットボックスに入れて、押す時に横から肩をたたかれた。

横を見てみると、満面の笑みで百代が立っていた。

「海人おごってくれ」

「は？」

「お願いだ海人！金欠なんだ！」

「てめぇ、前に４０００円貸せただろ」

「もう使ったしまった」

百代は即答した

その言葉をシカトをして、ボタンを押そうとすると

「なぁー海人～頼むよ～」

百代は後ろからもたれかかってきた。

「こんな美少女が言うんだぞ？男なら潔くおごれ」

はぁー俺はため息を吐き、百代のリクエストの親子丼とラーメンのチケットを買った。

「ふふふ、悪いな」

「貸しひとつな」

「えぇ～」

俺と百代は親子丼とラーメンを取り、テレビ近くの席に座った。

「いつも取り巻きの弁当食べてるんだろ？なんで今日は学食なんだよ…」

「いや～久しぶりにお前と食おうと思ったんだが、金欠ってことをすっかり忘れてた」

「死ね」

「別にいいだろ～？こんな美少女と一緒に食べれるんだ。役得だろ？」

「逆に損してるけどな」

そんな風にじゃれつきながら、ＴＶのニュースが流れた。

「昨日の午後七時ごろ、埼玉県深谷市の飲食店でエアトレックで逃げようとしていた無銭飲食の男性が
同じくエアトレックを履いていた男子学生に取り押さえられました。
調べによると、今までも近隣で無銭飲食を繰り返しており、また窃盗品を身につけていたことから警察では
余罪を追及しております。

男を取り押さえたのは、神奈川県川神市在住の風間翔一さんで、限定メニューを先に注文されて腹が立って本気で追い掛けたとのこと。
また、今年でエアトレックでの事故や事件が１３件発生しており、この調子でいくと去年より増加していまうとのこと…」

「おい、今ＴＶに出たの風間だろ？」

「ああ、キャプだな…」

相変わらず破天荒なやつだなと思いながら、昼食を過ごしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8881w/

真剣に空に憧れて

2011年10月31日13時11分発行